

今号でも接続法の用法を扱います。これまでの2回で名詞節中の用法と接続詞節中の用法を扱いましたので、今回は形容詞節と独立文での用法を見ていきましょう。

まずは形容詞節(関係節といっても同じことです)内での用法を見ていきましょう。初級の教科書では、先行詞が不定語(algo, alguien, etc.)や否定語(nada, nadie, etc.)である場合、関係詞に続く文では接続法を用いると説明されます。

¿Conoces a **alguien** que **puedas** recomendar como estudiante de intercambio?

交換留学生として推薦できる人を誰か知っていますか。

No hay **nadie** que **entienda** mis problemas.

私の窮状を理解する人は誰もいない。

先行詞が不定語や否定語でない文では、先行詞に定冠詞がついていれば直説法で、不定冠詞がついていれば接続法と考えるとよいかと質問されることがあります。確かにそういう傾向もあるかもしれませんが、正確ではありません。それに反する例はいくらでもあります。

Te prepararé **un** plato típico que en mi país todo el mundo **conoce**.

君に誰でも知っている僕の国の郷土料理を作ってあげよう。

Comeré **el** plato que me **sirva** mi marido, sea lo que sea.

夫が作る料理は、どんなものであれ、食べるだろう。

先行詞が指すものの存在が「確定」か「不確定」かにより(これは先行詞の冠詞が定冠詞か不定冠詞かは必ずしも一致しません)、それぞれ直説法、接続法が使われます。前者の例では、「実際に誰もが知っている(conoce)料理」であるけども聞き手はそれを知らないで「ある料理(un plato)」となります。後者では「夫がこれから作る(まだ具体的に確定していない)料理」なので動詞は接続法(sirva)になります。結局は形式的に答えを求めめるのではなく、文全体の意味を考える方がよさそうです。

ところで、関係代名詞節には「制限的用法」と「説明的用法」がありました(本誌36号参照)。

Hoy he comprado **un nuevo robot** aspirador, que **salió** al mercado la semana pasada.

今日新しいロボット掃除機を購入したが、それは先週市場に出たものだ。

これは説明的用法の例ですが、存在が確定している先行詞をさらに説明するというこの用法の性格からいって接続法が使われることはありません。

続いて独立文での接続法の用法について考えましょう。まず、願望を表すOjalá(que)の後には必ず接続法が使われます。

¡**Ojalá** **haga** buen tiempo mañana!

明日よい天気だといいな!

¡**Ojalá** yo **estuviera** de vacaciones todo el año!

一年中バカンスだったらいいな!

後者の例文では接続法の過去になっていますが、過去にすると「非現実」の意味合いが強くなります。実現可能性がない(または極めて低い)場合はこのように過去が使われます。次のような反語的感嘆文での接続法過去の用法も同じような原理で理解できるでしょう。

¡**Quién estuviera** de vacaciones todo el año!

誰が一年中バカンスでいるだろうか!

それでは次に、推量を表す副詞(句)と接続法を見ていきましょう。

Quizá Vd. **esté equivocado**.

あなたは間違っているかもしれない。

Quizá(s)は疑惑の副詞と呼ばれますが、後には接続法が使われます。直説法も可能ですが、その場合は確信度が高くなります。同類の語にtal vez, posiblemente, probablementeなどがあります。ネイティブスピーカーの語感では、probablementeの方がposiblementeより確率が高いようです。一方、quizáやtal vezはposiblementeよりもさらに実現の可能性が低い推量(疑惑)を表します。

これらの副詞をまとめると以下のようになります。

quizá tal vez *a lo mejor	posiblemente	probablemente
可能性: 低い←		→高い

Quizáやtal vezとほぼ同じ意味の副詞句にa lo mejorがありますが、こちらは必ず直説法になりますので注意が必要です。ただし、直説法だからといってquizáやtal vezより確信の度合いが高くなるわけではないようです。

A lo mejor la subida de los impuestos **afectará** negativamente a la economía del país.

増税は国の経済に否定的な影響を与えるかもしれない。

最後に少し特殊な接続法過去の用法について触れておきます。

Quisiera hablar con el director sobre el presupuesto 2020.

2020年度予算に関して部長とお話したいのですが。

この「quisiera + 不定詞」は、通常「丁寧」や「婉曲」の用法と説明されるものです。なぜ接続法過去(しかも-ra形のみ可)が使われるのか知らない人が多いかもしれません。実は、-ra形は元々ラテン語では直説法だったのです。そして中世のスペイン語では直説法過去や過去未来の用法もあったのです。この例文で"quisiera hablar"は現代語の"querría hablar"に相当します。過去未来形ならば丁寧の意味になることはご理解いただけるでしょう。実現不可能な条件文の後半部と考えればよいからです。

(Si fuera posible), **querría** hablar con el director...

(もしも可能であったならば)、部長とお話したいのですが……。

つまり、このquisieraは直説法過去未来の意味で使用されている古いスペイン語の名残りだったのです。このように使われる動詞は他にpoder, deber, haber等に限られます。

2010年の創刊号からこの連載を続けてきましたが、今回は最終回になります。10年間に渡り読んでくださった読者のみなさま、様々なご意見をくださった同僚や研究者のみなさまに心よりお礼申し上げます。



仲井 邦佳 / Kuniyoshi Nakai
プロフィールはp.12